
ちっぽけな幸せ、ちっぽけな愛

雨ル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちっぽけな幸せ、ちっぽけな愛

【Nコード】

N7456C

【作者名】

雨ル

【あらすじ】

くだらないと思っていた日常。けれど僕は、そんな日常でちっぽけな幸せを望む少女に出会った。

僕らは大きな空の前ではちっぽけな存在だ。この地にいる大多数の生命の中の欠片にすぎない。

それでも僕らは生きている。今というこの時間を生きている。そのことは僕らにとって大きいものだ。人生とは長いものだ。

けれど、今までの歴史を辿るとどうだろうか。僕らが生きていく、数十年なんか歴史の中ではなんてちっぽけなんだろう。いずれ忘れられていく些細なものにすぎない。

それでも僕らは生きていく。この広い広い大地を。

そして僕らは探している。未来に待ち受けている不透明なものを。それは、ちっぽけな幸せ。

この世界にとってあるかないかの幸せ。

それでも僕にとってはただ唯一の幸せ。

それは、みんなのものではなく、君のものでもない。

僕だけの幸せの形。

みんなはそれを笑うだろうか。

それでも僕はその幸せを探している。

ちっぽけな幸せだろうとも、僕はそれを見つけたしたいんだ。

くちっぽけな幸せ、ちっぽけな愛く

正直、面倒だと思う。

片手でペンを弄び、机の上にある白紙の用紙から目を逸らす。

あれだけ暑かった夏も終わり、秋に入ったのか入ってないかよく分からない時期。

窓越しから見える空はとても小さく見えた。

時刻にして三時を回ったころ。六時限目の現代文の時間。

何を思ったのか、僕らは馬鹿げた文章作りに付き合わされている。いったい何の冗談だろうか。冗談なのは先生の顔だけにしてほしい。

埋まらない用紙と黒板を交互に眺める。

深い緑色の黒板に白いチョークで流し書きのように一言。

あなたの未来になにを望みますか

刻々と時間は過ぎていく。

静謐な教室に響くのは、ただ忙しく綴られるシャープペンシルの音と時計の針の音。

静かなのにそれが僕の頭から離れず、うるさく響いた。

その問いかけは僕にとって漠然とし過ぎていた。あたかも当たり前のように過ごしている日常において、その問いかけは難解な問いかけだった。

必死にならなければ明日に生きられないわけではない現代において何を望めばいいのか分からない。必死に生きていない日常で求めるものは、文章にするのもおこがましいほどつまらないものだけだった。

僕は一度時計に目をやり、白紙の用紙に目を移す。

そして、あきらめたかのように嘘を綴った。

僕は大きな幸せを望みます。それは誰もが望んぞんでしまうすべての物を手に入れられる未来を僕は望みます。

僕は自分自身を笑った。誰もが望む未来。国語において答えはないと言われるがこれならどうだろうか。これが欲望にまみれた現代

を生きるものの答え。真理ではないだろうか。

でも同時に僕らが生きる数十年間では決して手に入るものではないということも知っていた。

そして、災難なんてどこで起こるかも分からないことも知っていた。

その文章を書いた日の放課後。僕はあっけなくこの人生の終わりを感じた。

暗がりの見通しのきかない交差点。標識を無視した自動車に僕は突っ込まれた。

考える暇などなかった。怖くはなかった。轢かれたという事実だけが僕の頭に響いた。

あの日、僕が人生の終わりを感じたわけだが、こうして高級そうなベツトの上で寝かされると自分が思うほど人間も弱くはないんだと実感した。

僕と自動車が対決した結果は、僕の惨敗だったが、足の骨折とそのおまけ程度ですんでしまった。

僕が眼を醒ましたのは事故後、一日もたたないうちだった。知らない部屋だった。それでもなんとなくことの運びを受け入れられた。動かす事を忘れてしまった下半身。

感覚はあるのに他人の足のような気がして気持ちが悪かった。

その後、医師が来て、両親が訪れた。僕はひどく心配する親をなだめるように大丈夫だよと、何度も告げた。どっちが親なのか分かったもんじゃない。

検査のため何日か僕の入院が決定すると、両親はあわてたように衣類などを持ち込む。そっとしてほしかった僕は内心疲れてしまっ

ていた。

僕は親の目の隙をつくつと、動かない足を支え中庭へと足を運んだ。そこはひどく穏やかな場所だった。

広々とした空間を切り取るように大木が等間隔に植わり、中心には花に囲まれるようにして噴水や水路が空間を壊すことなくそこにあった。

地面は黄緑色の柔らかな芝生が覆い、遮るもののない空からは太陽の光が優しく降り注いでいる。

そこが病院のいち施設であることに目を疑った。

僕はそこでようやく安堵のため息を溢すと近くにあった薄い青色のベンチに腰を下した。

そしてそのまま穏やかな風に身を任せる。

眠気が支配するまでそう時間はかからなかった。

気がつくつと、世界は終わりを迎えたかのように真っ赤に染まっていた。

遠く聞こえるひぐらしの声がいつもよりも切なそうだった。

どうやらいつの間にか眠っていたらしい。

「疲れているのか……」

それとも、この場所があまりにも心地よかったのか。

どっちでもかまわなかったが、あまり健康的とは言えない。

それに、ここ最近は夕方になるにつれて冷え込んでくる。下手すると風邪でも引きかねない。

「病院で風邪を引くつてか」

あまりの馬鹿さ加減で笑えてくる。

「さつさと戻るか」

合図のように掛け声をかけ、ベンチから起き上がると、膝からなにかこぼれたような感触がする。

よく見てみると、ベンチの下には真っ白な上等な生地の大きい布

が落ちていた。

どうやら、寝ている間に親切な人が掛けてくれたらしい。

誰が持ってきてくれたのかと、あたりを見回してもすでに誰もいなく、ただっ広く芝生が広がっているだけだった。

「もしかしたら、看護婦さんかも」

それ以上は興味がなくなり、白い布をたたむと抱え込む。

ベンチで寝ていたせいか首が痛かった。それと心なしか疲れて動くことも億劫だった。

「そういえば、父さんと母さん帰ったかな」

どうにも両親の心配性には胃が痛くなる。

「帰っているといいな……」

そう思っていると上の方から何かの気配を感じた。思わず見上げてしまう。

遠目だからはっきりと見えないが人影がうつすらと見える。

「いち、に、さん、し、……九階」

窓を八個通り越した先のガラスからちよつとだけ顔を出している。風で揺れた長い髪を見るに女性のようだった。

「確か、病室は六階まではずなのに」

医師が話してくれたことを思い出す。この時間六階以上に患者はいないはずなのに。

よく眼を凝らしてしてみる。

彼女は目線を遠くのほうにはしらせている。

ひどくはかなげだった。夕日に照らされるようにして映る横顔が、ここからでは見えないのだが憂いを帯びているようだった。

僕は少しだけ見とれていたのかもしれない。

だから、肩越しに零れて落ちてきた雫になかなか気がつかなかった。

「雨か？」

しかし空には雲ひとつなく雨が降っている気配はなかった。だとするとこの雫の正体は一つ。

「泣いている」

夕日に照らされながら、遠くを見ながら彼女は泣いていた。零れ落ちる涙を拭おうとせず、嗚咽も漏らさず、泣いていた。無感情だった。彼女はただ泣いている、いや涙を溢すという行為だけをしていた。

それが恐ろしかった。

人形のようなものだったからだろうか。

奇妙だったからだろうか。

いや違う。

僕はそこで初めて見たんだ。

その冷静なままの涙。

きつと自分でも涙を流しているのかわからない。

それでいて、自分がなんで泣いているのかも分からない。

それは純粹すぎる涙。

ただ溢れてくるのだろう。止められないのだろう。

理由もない涙。

それがすごく恐ろしく見えた。

そしていつの間にか、僕と彼女の視線が交差した。

それでも彼女は微動だしていない。まるで僕を生命として扱ってくれていないようだった。

僕は焦ってしまった。

なにもやましいことなんかないのに、悪い事をしているような気になった。

僕は彼女の視線から逃れようと走った。

僕はその日、ベットにはいても彼女の泣き顔が忘れられなかった。

なぜか僕は名も知らない彼女に興味を持ってしまっていた。

翌朝、味気のない朝食を終えた後、僕の足は担当医の部屋に向かっていた。

本当なら訪れようとも思っていなかったのだが、しかし僕はやってきてしまった。

「堺先生、いますか？」

少し控え目にノックしてみる。

いなければいなくて諦められるのに、次の瞬間には目の前のドアが開いていた。

「おお、平井くんではないかどうしたのじゃ？」

恰幅のよさそうな初老の老人が僕の担当医だった。

その白髪と白いひげからなぜか随分と胡散臭さを感じられるが、それでいて腕は確かだと聞かされた。

僕が黙っていると少し不思議に思ったのか、先生は体を斜めに向けて手を部屋の奥へと伸ばした。

「どうじゃ、立ち話もなんだから中にはいりなさい。お茶ぐらいはごちそうするよ」

僕は軽く頷くと部屋の奥へと進んでいった。

部屋の中は意外と物がなく、殺伐としていた。

病室と同じように白く区画された小さな四角形の部屋に、だいぶ使い込まれた茶色のソファと、小さなテーブル、もう動くことすらわからないレコードの機械といったもののほかには何も無いように思えた。

それでもどこから持ってきたのかわからないが、湯呑を抱えて持ってきた先生の姿を見るとそんなのどうでもよくなった。

もとより目的は一つ。長居するつもりはない。

先生がソファの前にある机に湯呑を並べると、僕をソファに座るように促した。

「いえ、そんなに長くないないので」

僕はそれを手で拒否すると先生だけソファに座った。

「で、話とはなんじゃね」

僕が昨日見た人影。いないはずなのに、確かにいた女性の話。

「先生は六階までしか患者はいないといっていましたよね」

先生は話の腰を折らずに黙って頷く。

「なら、九階にいる人はいったい誰なんですか」

先生は一瞬驚いたように僕の顔を見ると、真剣な顔になる。

「すまんが、平井君。少し長くなりそうだからこつちにきてお茶を飲みながら話すでしょう」

そういつて、再び僕をソファーに呼んだ。

ずずつと、先生がお茶をすすする音だけが世界に響いた。

僕はそのソファーに座るしかなかった。

陽のあたらない暗い階段を登っている。

辺りは静寂に包まれ、響くのは無機質な足音。

全てを覆いつくしてしまうように真つ白な壁を見ると、この階段が延々と続き目的の場所までたどり着けないんじゃないかと疑う。

しかし、そんなまやかしのような幻想は御伽話の中できこえてあつて、僕らの生きる現代にはない。

よつて、正しい道のであるならばいつかはたどり着いてしまう。転げ落ちたり、立ち止まらなければ僕らは目的の場所へと着くこ

とができてしまう。

僕は目的の部屋の前に着くと一度立ち止まった。

さすがに見知らぬ人の部屋に訪れるとなると何を話せばいいのかわからない。

それに特に用があるわけでもない。

僕は緊張のため息を吐くと、長い長い廊下に一つだけぱつりとあるドアにノックした。

「……………」

ノックしたのはいいが、肝心の何を言えいいのかまで考えていなかった。

そのまま言葉に詰まったまま数秒、僕の口をあけたまま閉じることを忘れてしまった。

気が遠くなるほどに途方にくれていると、僕のノック音を不審に思ったのか目の前の扉は少しだけ開く。

中から、辺りを見回すような仕草で出てきた彼女は、僕が想像していた人よりもだいぶ幼くて驚いた。

年齢はだいたい僕と同じだろうか。まだあどけなさの残る顔のつくり、肩まで生えそろえた黒い艶やかな髪。

見た目は随分幼く見えるんだが、それが少し異質だった。

彼女は表情を動かさなかった。

感情が感じられなかった。

僕がやってきたことに驚きもせず、笑いもせず、怖がりもせず、ただ見ていた。

まるで僕が空気であるかのように。至極些細なものであるかのように。

彼女にとって興味の対象へと成り立つことができなかった。

僕はそのままどれぐらいじっとしていたのだろうか。

その場で立ち尽くしていたのは、ほんの少しの時間だったが、永遠のようだった。

彼女は僕が動かないと分かったと、出てきたドアから再び部屋に戻ろうとしていた。

そこでようやく僕はここに何をしに来たのか思い出して、もうドアの奥に消えかかっている彼女を呼び止めた。

「ちよ、ちよっといいかな」

うまくかみ合わない舌で呂律が回らなかったが、なんとかそれを言うことができた。

その言葉を言うと、一瞬だけ目の前にいる彼女の肩が震え、首だけ振り返る。

無遠慮に彼女は僕を上から下までじっと観察すると、閉まりかけていたドアを大きく開いた。

その後、何事もなかったように彼女は首を元の位置に戻し先ほどのように歩きだす。

「……………」

過ぎ去る彼女を見つめ、大きく開かれたドアを見つめた。

「入ってもいいってことか」

僕はそのままドアの奥に座る彼女を見据え、ドアをもう一度見る。良く分からないがドアを開けたってことは許可されたということなのだろうか。

僕はそのまま開いたドアを無視するのはどこか違うと感じ、部屋に足を踏み入れた。

「お邪魔します」

とても控え目にあいさつすると足音をたてないように彼女のもとへと向かっていった。

なんだかとても不思議な心地だった。

ゲストを招待したまま、それを無視して窓の外を眺め続ける女の子。

招待されたのはいいが、とてもその場に居ずらい自分。

僕は思わず彼女の視線を追ってしまっていた。

透通るような青空をバックにして、見降ろすように眼下には無数の住宅街が立ち並ぶ。

地上よりもだいぶ高くに位置するこの部屋から見える景色は広く壮大だった。

夜のネオンが眼下にひろがる風景は絵になるのではないかと想像してしまった。

やがて、彼女は窓の方から顔を逸らすと、どこを見るでもなく壁と対面してその口を開く。

「ねえ……」

初めは誰に話しているのか分からなかった。

まるで壁に話しているような視線。

しかし、そこにいるのは彼女のほかに自分しかいるはずがなく、その語りは当然僕に向けられていた。

「あなたには、窓の外の景色がどんなふうに見える」

僕は初めて向けられた会話に驚きながらも、窓の外を眺める。

今まで毎日そこにいたので特にこれといった感想は思いつかず、ありのままの感想を告げた。

「広く、壮大に見えるかな」

そう答えると彼女は少し考えるようにして押し黙ると、おかしいことを聞いてきた。

「……じゃあ、ここからだとなが見えるの？」

「何が見えるかって、見たまんまだよ」

僕は変な質問だなと思った。

まるで僕と彼女の見ている世界が違うかのような、そんな質問だった。

「ううん、違うの」

そういうと彼女は少し俯いてしまった。

僕はなにか悪い事をしたのではないかとすこし焦った。

そんな様子を悟ったのか、彼女は俯いた顔を再び上げると、少しほほえんだ。

「私、日宮 朱音っていうの」

僕は初めの印象から今の自己紹介が別人みたいに思え、呆気にとられてしまっていた。

しかし、彼女が催促するように、君は、と聞いてきたところで我に返り、言葉を並べる。

「僕は、平井 大輔」

そして二人は小さく笑った。

まるで僕らが昔からの知り合いだったかのように、僕らはいつのまにか笑い合っていた。

何とも形容しがたい不思議な心地だった。

あの日、僕と朱音が出会ってから僕らはそれが普通であるかのように常に一緒にいた。

知らない人であるのに、なぜか知っているような人のように思える。

それはまるで夢。

こんなことを経験したことがあるだろうか。

見たこともないような人が夢に出てきて、でも自分はその人をあたかも知っているかのように接する。

夢が覚めてからようやくその違和感に気づき、けれどその夢が心地よいものだったことに気づく。

僕はこの今の状況を受け入れている。

それはたぶん夢だから。

でも夢ならば覚めてほしくなかった。

いずれやってくる覚醒の前まで僕はその心地よさに甘えていたかった。

「つて、ねえ聞いているの？」

考え事をしていた僕は、心ここに在らずといった様子でパイプ椅子に腰をおろしていた。

彼女がむくれた視線を向けたまま非難するまでまったく気付かなかった。

「あつごめん、なんだっけ……」

僕はバツが悪く苦笑すると必死に覚えているはずのない会話を思い出そうとした。

しかし、聞いていなかったことは頭の片隅にも残っているはずもなく首をかしげた。

そんな様子に彼女は呆れたのか、溜息を吐くと顔をしかめた。

「もう、いいよ。どうせ私の話なんて詰まんないですよーだ」

そういうと、彼女は僕から顔をそむけ窓の方を眺めた。

僕はあわてて、いくつか言い訳のような言葉を言ったが、どれも無視される。

ああ、これはどうしたもんだと考えていると、窓の向こうを見て

いる朱音の肩が震えた。

何事かと思いい声をかけようとしたが、僕の言葉は彼女の言葉にかき消された。

「ねえ、私が初めて会った時になんて言っただか覚えている」

僕が朱音に初めて会ったとき。

それは、どこか寂しそうだけれども感情の抜けた虚ろな瞳のまま突然語りかけられた。

いまとなつては、見せることがなくなった焦点の合わない目を僕に向けながら彼女は問いかけた。

「窓からの景色が、僕にはどのように見えるかだっけか」

彼女はこちらを向かないままこくりと俯いた。

「あなたの答えはともおおざっぱだった」

広く、壮大に見える。

確かそんなふうに答えていた。

「じゃ、今度は質問を変えるね。その景色を私も見れていると思う？」

そう言つて振り返つた彼女の顔が初めて会った時のように虚ろになつていた。

そしてそれはまるで僕を見ていないかのようで、その視線の先になにが映っているのか分からなかった。

僕が答えられないでいると、彼女は視線を窓の外に向けて言った。「例えばこの大きな空と、あなたがいう広く壮大な風景を見てみたいと思うことは馬鹿げていることなのかな」

彼女は、肩を震えさせながら、それでもとめることなく続けた。

「あなたが意識しないで歩いている場所の景色を見たいと思うことはちっぽけなことなのかな」

彼女は、とどまることなく続けた。

僕はそれに相槌も打てずただじつと彼女が語るのを聞いていた。

それは本当にちっぽけな願いだった。

なぜ彼女がそのことを願うのが分からないけど、けれど僕はいつ

のまにか彼女の手をつかんでいた。

せきを切ったように止まらなくなった願いと、いつからか流れ出した涙。

僕は出来るならばそれを叶えてやりたいと思った。

その涙を止めたいと思ってしまった。

だからその腕をつかむと彼女の目の前でかがんだ。

ちょうど座っている朱音と、僕の視線が重なる。

「なら、見に行こう。朱音が望む景色を」

そういつて僕は笑顔を作った。

彼女の涙の理由を知らなかったけれど、彼女が望む景色を知らなかったけれど。

僕は微笑んだ。

そして彼女も泣き笑いのままうなずいた。

「……一緒に行こう、そして探そう」

見ることは不思議なことだと思う。

視覚とは不可解なものだと思う。

なぜ僕らは世界をはつきりと認識するのだろうか。

考えようとしなければ至極当たり前のこと。

当たり前のことだから、大して興味など抱かない。

けれど、僕は考えていた。

この世界には、色があり、明暗がある。

一步一步、歩くことに微妙にその色彩は変化していき、見る角度によればそれは変幻自在とくす。

処理するのは自分自身の脳であり、それは自らが作り出しているイメージの類にすぎないのに、それすらも忘れてこの目に映る世界は万国共通のものであると認識する。

その誤解は、自分の範囲だけではなく、他者も巻き込む。

自分が見えている世界を、他人に押し付ける。

自分が見えている世界と、相手が見えている世界が同じだと信じ

てやまないものの間違い。

それが原因で様々な問題が生じることもある。

だから、僕は信じていた。

僕が今目にしている景色と、朱音が見ている景色が同じであるということを。

僕はそんな当たり前のことを当たり前だと思っていた。

しかしそれは違っていた。

僕はここで大きなミスを犯していたことを後々気づくことになる。

僕らは二人、肩を並べて歩いていた。

それは朱音が望んだことだったから。

僕らは流れていく景色を眺めながら無言で歩いていた。

僕は頭を抱えていた。

なぜ彼女は景色を見たいといったのか。

それと、なぜ涙を流していたのか。

いくら考えてもその答えは導かれることなく、途方に暮れていた。

僕は横であたりを見渡しながら歩く彼女を見つめた。

いったい彼女は何を見ているのだろうか。

そんな僕の視線に気がついたのか、ややあつて彼女は僕に首をかしげた。

「どうしたの？」

まさか、僕の中にあるいくつかの不可解な疑問を、みなまで本人に伝えられるはずはなかった。

僕は目の前に広がる大きな下り坂で立ち止まると、眼下に広がる住宅地を見下ろす。

そこに広がる景色は、本当に何でもない景色だろう。

しかし、僕には今までとはだいぶ違って見えた。

「今まで、意識してなかった。世界がこんなに広がったこと。こんなに色鮮やかだったこと」

空には青があり、地面には黒があり、草には緑があり、家には様

々な色がある。

ほんのちよつとだけでも意識するだけで、こつも世界は変わるものなのだと気付かされた。

きっかけは多分、朱音の質問。

僕は大きくて周りには興味がなかった。

けど、どうだろうか。

僕は確かに” 見ている ” んだ。

だから僕は少しだけうれしくなった。

新鮮な風に当てられるような幸せな気持ちになったんだ。

きつと、彼女も今そんな気持ちなんだろうと思った。

確信していた。

しかしそれは、不意に、その彼女の一言によって脆く崩れ去ってしまった。

「私の世界は、狭いんだ。それに色彩はほとんどないの。まるで漆黒の闇」

その無邪気そうに駆け回っていた瞳は、色を失っていった。

「やっぱり、私にはあなたと同じようには世界は映らないの。せつかく誘ってくれたのにごめんね……」

探せなくてごめん。

そついうと、彼女は涙をこらえるように俯いた。

正直、僕は困惑していた。

何が起こったのか理解できずに立っていることしか出来なかった。

僕らは逃げ帰るようにもとの病室に戻ると、彼女は尋ねられるでもないのにつらつらと自分の病気について語りだした。

幼いころから、たいして視力は良くなかったらしい。

それでも生活する分には支障はなく、病院でお世話になるには至らなかった。

しかし、ある日を境にしてその眼は急激に彼女の生活空間を蝕んでいった。

初めは、多少暗く感じる程度でいくらかは光を感知できるくらいだったが、そのうち大まかなもの以外の存在が希薄になっていった。それと同時に世界は少しずつ色を失っていき、今では完全な黒と白みしかかった灰色ぐらい。

部屋の中でこそ、多少は認知できるものの、日光の照らす外界では盲目に等しかった。

夕刻を迎えようとしていた。

その物語は終わりを告げようとしていた。

「私には見たいものがあつた」

朱音は自分の病について話終えると、続けざまに言った。

「私は、夕日が見たかった」

そついうと窓の外に視線を移す。

空には赤く染まつた太陽が映し出されていた。

けれど、彼女の瞳にはそれは映っていないのだろう。

「私には以前好きな人がいたの」

彼女は胸に手を置き苦しむように続けた。

「この病院で入院していた人なの」

けれど、その人はもういない。

直観的だがそう感じた。

「いつか、彼は言ったんだ」

僕は、夕日がこの世で一番綺麗だと思う。

世界が暗闇になる前に、何もかもを朱色に染めていく。

それはきつと君の名前のような、朱音のような綺麗な色なんだ。人はそれを見て終末を連想する人がいる。

けれど僕は、それもひっくりくるめて美しい最後なんだと思うんだ。

「私は、彼が好きだといった夕日が見たかった」

それが彼女の願い。

初めて彼女に会ったとき、夕日を見ながら涙をこぼしていた理由。「それってみんなからしてみたら随分とおかしなことだけれど、私からしたら一生懸けてでも見たかったもののなの」

言うならば、彼女の幸せは夕日を見ること。

世界が紅く染まる光景を彼女はずっと望んでいた。

僕はそんなちっぽけな幸せに心を動かしてしまっていた。

あの時どうしても叶えてやりたかった。

彼女が見たいといったものを見せてやりたかった。

「じゃあ、見に行こう」

そういつて、彼女の手を再び手を取った。

きつと僕には夕日を見せてあげることとはできないだろう。

それでも僕は、大きく窓を開いた。

「今、この世界は君の望むような光景になっている」

紅く輝くようにすべてを覆い尽くす。

「ほら、手をのばしてみて。君は今その景色に触れているんだ」

もっと遠く、もっと遠く。

彼女はなにかに取りつかれたように手を伸ばした。

その眼には何を映しているのか分からなかったけれど、彼女は無

心になって手を伸ばした。

すでに夕日は落ちようとしていた、景色はやがて夜になる準備をし始めた。

それでも手を伸ばし続けていた。

その身を乗り出すように、彼女は空に向かって涙をこぼしていた。

そして僕も空を見上げた。

出来るなら、その世界が終らないように願った。

目をつぶって僕は、夜になるのを見ないようにした。

「見つけた」

不意にそんな声が聞こえた。

僕は目をつぶっていたため、何が起こっているのか分からなかつ

た。

けれどそれは幸せそうな声だった。

朱音は幸せそうにそう呟いた。

それを最期に朱音の姿は、病室から姿を消した。

それは、地面がちょうど夕日のように紅い液体で染まったのと同時刻だった。

緩やかな、古い異国の音楽に目を覚ました。

僕の視界を埋めるように真つ白な天井。

ベットよりも寝心地の良い古びたソファ―。

僕は今まで何をしていたのか気づくまで少し時間がかかった。

「確か僕は、九階の彼女の話聞きに来て……」

途中まで聞いて寝てしまっていたらしい。

僕はしばらくまどろんでいた。

古いレコードから流れる音楽に身をまかせながら、今まで見ていた現実のような夢を思い出していた。

かつて九階にいた、視覚に異常を持った少女。

夕日を見ることを望んだ少女。

しばらく考え込んでいると、部屋のドアから自分の良く知る先生が顔を出した。

「やあ、平井君起きてましたか」

今まで患者を見ていたのだろうか、いくつもの資料を抱えていた。

「途中で寝てしまって、すいません」

そういうと先生は微笑みながら僕の前に座った。

「いやいや、いいんじゃないよ。それより続きでも話そうか」

昔、朱音の担当は目の前にいる先生。

夢では出てこなかったが、彼女とは親しかったらしい。

「いえ、その話はもう大丈夫です」

僕も彼女と一緒に過ごしたから。

彼女のことは先生と同じくらい理解していた。

「ただ最後に、失礼ですが彼女の死因は自殺ですか」

僕は彼女の死に際を思い出す。

その問いかけに先生は小さく頷いた。

「……そうですか」

僕はそれを聞くと立ち上がった。

死因は自殺なんかじゃない。

あれは確かに僕が……。

「長々とすいませんでした」

そういつと僕はドアに手をかけた。

僕が部屋から出ようとしたとき、先生は独り言のように呟いた。

「彼女の死に顔はとても穏やかだったのう。まるでこの世の幸せを手にしたかのようなだった」

僕は聞こえないふりをしながら、そのまま振り向かず部屋を後にした。

なぜか無性に悲しく、無性に嬉しかった。

その後、検査とは名ばかりの療養を終え、僕は学校に復帰した。今まで大して興味のなかった学校もなぜか少しばかり楽しく思えてきた。

僕は先日書いた、未来に望むものの、プリントを手にして屋上に登る。

下校時間をとくに過ぎてしまった屋上には既に誰もいなかった。

空は、紅く染まっていた。

それはあの日のように輝くようにきれいだった。

「僕は、もしかしたら幸せだったのかもしれない」

最期の最期でようやく彼女の幸せを叶えることができた。

それは僕にとってもうれしく、幸せだった。

どうしてこのように思ったのかは口にできなかった——いや、口にして表せるような、陳腐なものじゃない。

「僕は多分朱音のことが……」

やはり口に出来ない。

「でも、これでまたやり直しか」

僕はそうつぶやくと屋上のフェンスから身を乗り出す。

「せっかく幸せを見つけたのに、もうその相手はいないってか
けれどもしかしたらそれでいいのかもしれない。」

朱音が一生懸ってその幸せを見つけたように、一瞬で終わってしまふような幸せは幸せとはいわない。

「ちっぽけな幸せか」

僕はその日返されたプリントを折り紙のように折る。

意味のないたいそうな未来を望んだくだらない文。

その価値は、彼女が望んだちっぽけな幸せとは比べられないほど
低俗なもの。

僕はそのプリントを飛行機のようにすると、夕日に向けて飛ばした。
た。

その飛行機は夕日に届くことなくすぐに墜落する。

そんな光景を目にすると小さく笑った。

「なあ朱音、僕は見つけられるだろうか」

君が探したようなちいさな幸せを。

君が示したような小さな愛を。

「見つけられるといいな」

そついうと夕日が沈む最期を眺めた。

「きつと、見つけてみせるから」

次第に紅は儚げに姿を消していく

僕は世界が暗くなるまでそこに立ちつくした。

「僕は朱音が、好きだった」

僕の目から不意に涙がこぼれた。

（後書き）

なんか、恋愛っぽくないのに恋愛にしまっすいません。
久しぶりの方は、お久しぶりです。

初めての方は、はじめまして。

雨流です。

今回私の小説を読んでもらいありがとうございました。それとなんだかくどい文で申し訳ありません。

ということ、なにか思うところがあれば気軽にお願いします。
では、また会えるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7456c/>

ちっぽけな幸せ、ちっぽけな愛

2010年10月8日14時41分発行